

試験管

寺田寅彦

青空文庫

一 靴のかかと

夏になったので去年の白靴しろぐつを出して見ると、かかとのゴムがだいぶすり減っている。靴自身も全体にだいぶひどくなっているから一つ新調することにした。買いに行った店にはゴムのかかとのが無かったのでそのかわりに、かかとの一隅いちぐうに小さな三角形の鉄片を打ちつけたのをなんの気なしに買って来た。それで、古いほうの靴は近所の靴屋へ直しにやって、そうしてこの新しいのをおろしてはいて玄関から一步踏み出してみて、そうして驚いた。

かかとの裏の三角形の鉄片がまず門内の敷石と摩擦してゴリゴリまたゲリゲリとすさまじい音を立てる。道路のアスファルトでも、研究所の床のコンクリートでも、どこを歩いてもこの小さな鉄片がなりに似合わぬ高く鋭い叫び声を発して自己の存在を強調する。その音が頭の頂上まで突き抜けるように響き渡って、何よりもまず気が引けるのである。人とすれちがう時などには特に意地悪くわざわざガリガリと強い音を出す。すると人がびつくりして自分の顔を見るような気がするのである。

この一センチメートル三角ぐらいの鉄片は、言わば「やましき良心」のごとく、また因果の「人面瘡」のごとく至るところにつきまとして私を脅かすのであった。

だれが考えたものか知らないが、この鉄片はとにかく靴のかかとの磨滅を防ぐために取り付けたものには相違ない。しかし元来靴というものは、「靴自身のかかとのすり減らないためにはくもの」ではなくて、生身の足を保護するためにはくものである。もし足はどうなつてもいい、靴さえ減らなければいいというのならば、いつその事全部鋼鉄製の靴をはけばいいわけである。

はきごこち、踏みごこちの柔らかかであるということは、結局磨滅しやすいということと同じことになるのではないか。靴底と地面との衝撃の結果として靴底が磨滅されるおかげで、不愉快な振動が肉体に伝わることを防止するのであろう。

畳がすり切れて困るから、床を鋼鉄張りにするというのも同じような話である。

こんな不平をいだいて、二三日歩き回っているうちに、不思議なことには、この靴底の三角の鉄片の存在を主張する叫び声がだんだんに、自然に弱くなって来た。ゴリゴリ、ゲリゲリと鋸の目立てをするような音はほとんど聞かれなくなつた。そうして、この鉄片の軽く地面をたたたくコツコツという音が、次第にそれほど不愉快でなく、それどころか、お

しまいにはかえつて一種の適度な爽快そうかいな刺激として、からだを引きしめ、歩調を整えさせる拍節の音のようにも感ぜられるようになって来た。

思うに、従来はいていた靴のかかどがだいぶ減つて低くなっていたので、それに長い間慣らされた足の運びが、今度の新しい靴の少しばかり高いかかどに適應するまでに少しばかり骨が折れたものと見える。

そのうちに、古いほうの靴のゴム底ができて来て、試みにそれをはいて歩いてみると、なるほど踏みごころは柔らかいが、今度はあまり柔らか過ぎて、べとべとした餅もちの上でも歩くような気がする。はなはだたよりない気持ちがあるのであった。

これに似た他の場合を思い出す。

半年ほど下駄げたというものはかないでいる。そうして久しぶりに下駄をはいて四五町も歩くと、足一面が妙にひきつれたようになって歩けなくなる。おしまいには腰のへんまでひきつってしまう。それが、足袋たびをはいてだと、それほどでもないが、素足のままで特別にひどいようである。

はき物でさえ、そうしてはき物の大きさや素材のこんな些細さいさいな変化でさえ、新しいものに適應するということの難儀さかげんがこれほどまでに感じられるのである。過去の世界

で育ち過去の思想で固まった年寄りの自分らが、新しい世界を歩き、新しい思想に慣れるまでの難儀さ迷惑さはどのくらい大きいものか、若い人には想像するさえむつかしいであろうと思われる。

二 草市

七月十三日の夕方哲学者のA君と二人で、京橋ぎわのあるビルディングの屋上で、品川沖しながわおきから運ばれて来るさわやかな涼風の流れにけんぐしながら眼下に見通される銀座ぎんざ通りおのはなやかな照明をながめた。煤煙ばいえんにとぎされた大都市の空に銀河は見えない代わりに、地上には金色の光の飛瀑ひばくが空中に倒懸していた。それから楼を下つて街路へおりて見ると、なるほどきようは盆の十三日で昔ながらの草市が立っている。

真菰まこもの精霊しやうりようだな棚れんげ、蓮花の形をした燈籠とうろう、蓮の葉やほおずきなどはもちろん、珍しくも蒲がまの穂や、紅べにの花殻はながらなどを売る露店が、この昭和八年の銀座のいつもの正常の露店の間に交じつて言葉どおりに異彩を放っていた。手甲てっこう、脚絆きゃはん、たすきがけで、頭に白い手ぬぐいをかぶった村嬢の売り子も、このウルトラモダンな現代女性の横行する銀座

で見ると、まるで星の世界から天降った天津乙女のように美しく見られた。

子供の時分に、郷里の門前を流れる川が城山のふもとで急に曲がったあたりの、流れのよどみに一むらの蒲が生い茂っていた。炎天のもとに煮えるような深い泥を踏み分けては、よくこの蒲の穂を取りに行ったものである。それからというものは、今日までほとんど四十年の間ついぞ再びこの蒲を見た記憶がなかったように思うのである。

この蒲の穂を二三十本ぐらい一束ねにしたのをそっくりそのままにA君が買おうとして価を聞くと、売り手のおかみさんが少し困ったような顔をした。「みなさん、たいいてい二本ずつお買いになりますか」という。すると、他の客を相手にしていた亭主が聞きつけて「いけませんいけません」という。つまり、二本ずつは売るが一わは売らないというのである。伝統は尊重しなければならぬ。哲学者のA君は、とうとう十銭を投じて二本だけで満足するほかはなかった。

少し歩いてからしなびた紅の花殻をやはり二三本藁包にしたのを買った。また少し歩くと、数株の菱を舗道に並べて売っている若い男がいた。A君はそれも一株買った。売り手の男が、なんだかひどくなつかしそうな顔をして、A君の郷里はどこかと聞いた。

この文化的日本の銀座の舗道の上に、びしよびしよにぬれて投げ出された数株の菱を見

て、若い日の故郷の田舎いなかの水辺の夢を思い出す人は、自分らばかりではないと見える。

神代しんじからなる蒲の穂や菱の浮き葉は、やはり今でも日本にあるにはあるのである。精しょう霊りょう棚だなを設けて亡魂を迎える人はやはり今でもあるのである。これがあつた限り日本はやはり日本である。そんな事を話しながら一九三三年の銀座を歩くのであつた。

三 熱帯魚（その一）

百貨店の花卉部かきぶに熱帯魚を養つたガラス張りの水槽すいそうが並んでいる。暑いある日のことである。どう見ても金持ちらしい五十格好のあぶらぎつた顔をした一人の顧客が、若い店員を相手にして何か話している。水槽につけた紙札に魚の名と値段めだかが書いてある。目高めだかぐらいの魚が一尾二十五円もするのである。金持ちらしい客は「フム、これは安いねえ」「安いんだねえ」と繰り返しながらしきりに感心している。若い店員は心持ち顔を長くしたようであつたが、「はあ、……比較的」と答えた。そうして、ずうつと胸をそらしたのであつた。

四 熱帯魚（その二）

いろいろな熱帯魚をよく見ていると、種類によつてやはり一挙一動にそれぞれの特徴があるように思われて来る。それを些細ささいに観察していると三十分ぐらいの時間をつぶすのはなほだ容易である。

熱帯魚を見物したあとで、とある映画館へはいった。おりから映し出された映画は「三万両五十三次」とか題する時代劇であつた。その中に、数人の浪士が、ちよこちよこと駆けずり回る場面がなんべんとなく繰り返される。なぜああいうふうにぎくしゃくした運動をしなければならぬものかと思つて見ているうちに、ふいと先刻見た熱帯魚を思い出した。スクリーンの長方形の格好もほぼあのガラス張り水槽と同じである。画面の灰色の雰ふ囲ん気きが水のようにも思われる。その中を妙な格好をした浪士が、妙にちよこちよことあつちへ走り寄るかと思つと、またこつちへ駆け寄る。みんなでそろつておじぎをしたりする。それが、そう思つて見ると、あの先刻見て来た熱帯魚の群れの遊泳するさまとかなりまで共通なところがあるように思われたのであつた。

五 熱帯魚（その三）

喫茶店の二階で友人と二人で話していた。椰子やゴムの木の鉢はちと入り乱れて並んだ白いテーブルを取りかこんだ人々の群れには、家族連れも多かつたが、ともかくも自分らのように不景気な男ばかりの仲間はまれであるように見受けられた。

テーブルの横の台の上に、ガラスの水すい槽そうが一つ置いてあって、その中にただ一匹の美しい洋紅色をした熱帯魚が泳いでいた。ベタ・カンボジャという魚らしい。それがただ一匹で泳いでいるのが、このいったいにぎやかな周囲の光景に対比していかにもさびしうに見えた。自分がそれを指さして「さびしそうだねえ」と言ったら、友人の哲学者は「どうも少し病的のようだ」と答えた。魚が病的だというのか、そういうことをいうのが病的だか、それとも、こういう魚を飼うことがそうなのかわからなかった。魚はそのうちに器底に沈んで、あっちへ壁のほうを向いてしつぽをこっちへ向けたまま、じつとして動かなくなってしまった。つまらないから寝てしまったのかもしれない。

六 音の世界

ある日、街頭のマイクロフォンから流れ出すジャズの音を背後にして歩きながら、芭蕉翁うわうを研究しているK君が「じつとしていて聞く音楽と、動きながら聞く音楽とがある。じつとしていて聞くような音楽はもうなくなってしまいはしないか」という意味のことを言った。

またある日、地下鉄からおりて歩きだすと同時に車も動きだして、ポーツと圧搾空気の汽笛を鳴らす、すると左の手に持っているふろしき包みの中の書物が共鳴して振動する。その振動が手の指先に響いてびりびりとしびれるように感じられた。

研究室へ帰って新着の雑誌を読んで行くと「音の触感」に関する研究の報告がある。蓄音機のレコードの発する音響をすっかり殺してしまつて、その上に耳を完全にふさいで、ただ指先の触感だけで楽音の振動をどれだけ判別できるかということを研究したものである。その結果によると、その振動が二つの音から成り立っている場合に、それが二つだということがちやんと判別ができて、その上にそれがオクターヴか五度か短三度か長六度かということさえわかるものらしい。それでその著者は聾者ろうしやのための音楽が可能であろうということ論じ、また普通の健全な耳を持つている人でも、音楽を享樂するのに耳だけ

によるのではなくて実は触感も同時に重大な役目を勤めているのではないか、そうして、それを自覚しないでいるのではないかという意味のことを述べている。そう言われると、そんな気もする。少なくともジャズなどと触感とは縁が深そうである。

夕方藤棚ふじたなの下で子供と涼んでいた。「おとうさん、ウム——と言っていると、あの蚊がみんなおりて寄ってくるのね」という。

自分の子供の時分、郷里ではそういう場合に「おらのおとのかむ——ん」という呪じゆも文を唱えて頭上に揺曳ようえいする蚊柱かばしらを呼びおろしたものである。「おらのおとと」はなんのこともかわからないが、この「む——ん」という声がたぶん蚊の羽根にでも共鳴して、それが、蚊にとつてはすておき難い挑戦あるいは誘惑としての刺激を与えるせいであろうが、それにしても、その音源のどの方面にあるかということを一瞬間に識別するのはどういふ官能に因るものか、考えてみると驚嘆すべき能力である。自分などは、往来でけたたましい自動車の警笛を聞いても存外それが右だか左だかということさえわからないことがあるのに、あの小さな蚊は即座に音源の所在を精確に探知し、そうして即座に方向舵ほうこうだをあやつってねらいたがわずまっしぐらにそのほうへ飛来するのである。

敵の飛行機の音を聞きつけてその方向を測知するという目的のために、文明国の陸軍で

は、途方もなく大きな、千手観音せんじゆかんのんの手のようなまたゴーゴンの頭のようなラツパをもった聴音器を作っている。しかし蚊のほうは簡単である。生まれた時からだれにも教わらずに役立つ最も鋭敏な優秀な器械を備えているのである。左右の羽根の刺激の不均のため、無意識に自動的に羽根の動きの不均が起こって、結局左右が平均するまでからだを回転させ、そうして刺激を増大するような方向に進行させるといふ自動調整器を持参しているであろうか。

銀座の楽器店の軒ばにつるした拡声器が「島の娘」のメロディーを放散していると、いつのまにか十人十五人の集団がその下に円陣を作るのも、あながち心理的ばかりではなくて、なにかわれわれのまだ知らない生理的な因子がはたらいているのかもしれない。

朝九時ごろ出入りのさかな屋が裏木戸をあけて黙ってはいって来て、盤台を地面におろす、そのコトリという音が聞こえると、今まで中庭のベンチの上で死んだように長くなって寝そべっていた猫ねこが、反射的に飛び起きて、まっしぐらに台所へ突進する。それももちろん結局は生理的であるとも言われようが、しかし、あらゆるいろいろの類似の「コトリ」という騒音の中で、特別な一つの種類であるところのさかな屋の盤台の音を瞬時に識別する能力はやはり驚くべきものである。

近代の物質的科學は人間の感官を追放することを第一義と心得て進行して來た。それはそれで結構である。しかしあらゆる現代科學の極致を尽くした器械でも、人間はおろか動物や昆こんちゆう虫の感官に備えられた機構に比べては、まるで話にもならない粗末千萬なものであるからおかしいのである。これほど精巧な生來持ち合わせの感官を捨ててしまうのは、惜しいような気がする。

たとえば耳の利用として次のようなことも考えられる。

すべての音は蓄音機のレコードの上に曲線として現わされる。反対にすべての週期的ないし擬週期的曲線は音として現わすことができる。たとえば驗潮儀に記録されたある港の潮ちようせき汐昇降の曲線をレコード盤に刻んでおいてこれを蓄音機にかければ、たぶんかなりな美しい樂音として聞かれるであろう。そうしてその音の音色はその港々で少しずつちがつて聞こえるであろう。それでこのようにして「潮汐の歌」を聞くことによつて、各地の潮汐のタイプをある度まで分類することができるかもしれない。あるいはまたこの方法によつて、調和分析などにはかからない潮汐異常や、地方的固有振動を発見することもできるかもしれない。

またたとえばひと月じゅうの氣圧の日々の変化の曲線を音に直して聞けば、月によりま

小屋の建築の見てくれの美観だけが問題になるようであるが、それでもまだこの門衛の失職する心配は当分なさそうである。感官を無視する科学者も時にはおいで物質を識別する。むつかしやの隠居は小松菜こまつなの中から俎板まないたのにおいをかぎ出してつけ物の皿さらを拒絶する。一びん百円の香水でもとにかく売れて行くのである。一方ではまた、嗅覚きゆうかくと性生活との関係を研究している学者もあるくらいである。

嗅覚につながる記憶ほど不思議なものはないように思う。たとえば夏の夕に町を歩いて、ある、ものの酸敗したような特殊なおいをかぐと、自分はどういうものかきつと三つ四つのところに住んでいた名古屋なごやの町に関するいろいろな記憶をよび起こされる。たとえばまた、銀座松屋ぎんざまつやの南入り口をはいるといつでも感じられるある不思議なおいは、どういうものか先年アンナ・パヴロワの舞踊を見に行ったその一夕の帝劇ていげきの観客席の隅ぐもに自分の追想を誘うのである。

郷里の家に「ゴムの木」と称する灌木かんぼくが一株あった。その青白い粉を吹いたような葉を取つて指頭でもむと一種特別な強い臭気を放つのである。この木は郷里の家以外に、いづれでも見たという記憶がない。近ごろよく喫茶店きっさてんなどの卓上を飾るあの闊葉かつようのゴムの木とは別物である。しかし今でも時々このいわゆる「ゴムの木」の葉のにおいに似た

においをかぐことがある。するときつとこの昔の郷里のゴムの木のおいを思い出すと同時にある幼時の特別な出来事の記憶が忽然こっぜんとよみがえって来るのである。

なんでも南国の夏の暑いある日の小学校の教場で「進級試験」が行なわれていた。おおぜいの生徒の中に交じって自分も一生懸命に答案をかいていた。ところが、どうしたわけか、その教場の中に例のいやなゴムの葉の強烈なおいがいっぱいにみなぎっていて、なんととも言われない不快な心持が鼻から脳髄へ直接に突き抜けるような気がしていた。それだのおおぜいの他の生徒も監督の先生もみんな平気な顔をしてそんなにおいなど夢にも気がつかないでいるように思われた。それがまた妙に心細くひどくたよりなく思われた。たとえば、下肥しもこえのにおいやコールタールのにおいには、われわれに親しい人間生活の幻影がつきまとっている。それに付帯した親しみもありなつかしみもありうるであろう。しかし異国的なゴムの葉のにおいばかりは、少なくとも当時の自分の連想の世界を超越した不思議な魔界の悪臭であった。この悪臭によって自分はこの現世から突きはなされてただ一人未知の不安な世界に追いやられるような心細きを感じるのであった。もちろんその当時そんな自覚などあろうはずはなかったが、しかし名状のできないこの臭気に堪えかねて、とうとう脳貧血を起こしたのであった。

もつとも幼時の自分は常に病弱で神経過敏で、たとえば群集に交じって芝居など見ても、よく吐きけを催したくらいであるから、その時もやはり試験の刺激の圧迫ですでに脳貧血を起こしかけていたために、少しの異臭が病的に異常に強烈な反応を促進したかもしれない。

それはとにかく、今でもいくらかこれに似た木の葉のにおいをかぐと、必ずこの昔の郷里の小学校の教場のある日のヴィジョンがありありと現われる。そうしてこれに次いでいろいろさまざまな幼時の記憶が不可解な感応作用で呼び出されるのである。

八 鏡の中の俳優I氏

某百貨店の理髪部へはいつて、立ち並ぶ鏡の前の回転椅子かいてんいすに収まった。鏡に写った自分のすぐ隣の椅子に、半白で瘦躯そつくの老人が収まっている。よく見ると、歌舞伎俳優かぶぎで有名なIR氏である。鏡の中のI氏は、実物の筆者のほうを時々じろりじろりとながめていた。舞台で見る若さとちがって、やはりもうかなり老人という感じがする。自分のほうでもひそかにこの人の有名な耳と鼻の大きさや角度を目測していた。

この人の芝居でいちばん自分の感心したのは船上の盛綱もりつなの物語の場である。しかしそれよりもこの人に感心したのは氏が先年日子夫人と同伴で洋行したときに、パリ在住の通信員によつて某紙上に報ぜられたこの夫妻の行動に関する記事を読んだときである。パリのまん中でパリジャンを「異人」と呼び、アンバリードでナポレオンの墓を見て「ナンダやっぱりヤソじやないか」と言つたとある。日夫人は、日本からわざわざ持参のホオズキを鳴らしながら、相手かまわずいつさい日本語で買い物をして歩いた。自分はこの記事を読んだときに実に愉快になつてしまつて、さつそく切抜帳の中にこれらの記事をはり込んだことであつた。西洋人なら乞食こじきでも尊敬しようといったような日本人の多い中に、こういう純粹な日本人の江戸つ子が、一人でもまだ存在するということが当時の自分にはうれしかつたのである。

I 氏の下側から見た鼻の二等辺三角形の頂角を目測しながら自分がつい数日前に遭遇したある小事件を思い出すのであつた。

ある途上で、一人の若い背の高い西洋人の前に、四五人の比較的背の低いしかし若くて立派な日本人が立ち並んで立ち話をしていた。何を話しているかはわからなかつたが、ただ一瞥いちべつでその時に感ぜられたことは、その日本の紳士たちのその西洋人に対する態度

には、あたかも昔の家来が主人に対するごとき、またある職業の女性が男性に対するごとき、何かしらそういったような、あるものがあるように感ぜられた。その西洋人がどれほどえらい人であったかは知らないが、単にえらさに対する尊敬とは少しちがったある物があるように感ぜられた。そうして、その時の自分にはそれがひどく腹立たしくも情け無くも思われまたはなはだしく憂鬱ゆううつに感ぜられた。

ことによると、実は自分自身の中にも、そういうふう^{ついで}に外国人に追従ついでを売るようなさもしい情け無い弱点があるのを、平素は自分で無理にごまかし押しかくしている。それを今眼前に暴露されるような気がして、思わずむつとして、そうして憂鬱ゆううつになったのかもしれない。

それはとにかく、自分はその同じ日の晩、ある映画の試写会に出席した。映写の始まる前に観客席を見回していたら、中央に某外国人の一団が繩張りなわばした特別席に陣取っていた。やがて、そこへ著名な日本の作曲家某氏夫妻がやって来てこの一団に仲間入りをした。まさに映写されんとする映画を作った監督はその某国の人であり、録音された音楽は全部この日本人の作曲である。見ているとこの外国人の一団はこの日本の作曲者を取り巻いてきわめて懇懃いんぎんな充分な敬意を表した態度で話しかけている。そうして、これに対するこの

日本人は、たとえばまず弟子でしに対する教師ぐらいな、あるいは事によるともう少しいばつた態度で、笑顔えがお一つ見せずにもしろ無愛想にあしらっている、というふうにとにかくもその時の自分には見えたのである。それがなんとなくその時の自分には愉快であった。胸につかえていたものが一時に下がるような気がした。昼間見た光景がまさしく主客顛倒てんとうしたのである。しかしこの昼と夜との二つの光景を見る順序が逆であつたら、心持ちはまたおのずからちがつたことであろう。批判はやはり「履歴の函数かんすう」である。

こんなことを思い出しながら俳優I氏の鼻や耳をながめていた。そうしてたとえば日本の学者や芸術家が一般にこのI氏の半分ののんびりした心持ちと日本人としての誇りとをもち事ができたらどんなにいいだろうというような気がした。もちろん気がしただけである。

蒸すように暑い部屋へやの天井には電扇がゆるやかに眠そうに回っていた。窓越しに見えるエスカレーターには、下から下からといろいろの人形じんけいがせり上がっては天井のほうに消えて行った。ところてんを突くように人の行列が押し送られて行った。

気のついた時はもうI氏はいなかった。

政党大臣や大学教授や官展無審査員ならば、ところてんのようにお代わりはいつでもで

きる。しかしI氏くらいの一流の俳優はそう容易には補充できない。

そんな事を考えながら、自分もエスカレーターに乗ってM百貨店の出口に突き出されたのであった。

(昭和八年九月、改造)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第四卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年5月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年6月13日第65刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

試験管

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>